

言語学習における情意面の一考察(4)

— モーティベーションの研究動向 —

竹 田 明 彦

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

A Study of the Affective Domain in Language Learning (4): A Literature Review on Motivation in Language Learning

Akihiko Takeda

*Department of English, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

This study reviews literature on motivation in language learning. Since Gardner and Lambert began to study motivation in Canada from the sociocultural point of view, a lot of similar research has been done. We still do not have a clear idea of learning motivation, however.

The purpose of this study is to elucidate the concept of motivation and attitudes, their elements and relation and to review the developments from studies of integrative/instrumental motivation and intrinsic/extrinsic motivation which have been conducted so far. This paper also discusses some recent studies of motivation in foreign language situations in the 1990's, which will be a great help to us to conduct our survey on learning motivation in Japan.

社会心理学的な観点から Gardner と Lambert が motivation の研究を始めてから、いろいろな言語環境で追随研究が行われてきた。ところが、現在にいたってもまだ言語学習における motivation について十分に解明されていない。その理由としては、motivation と attitude の概念や構成要素の複雑さ、測定の難しさ、それぞれの言語環境によって生ずる多様な環境要因が考えられる。

本研究では、言語学習における motivation の文献から、その概念と構成要素、および attitude との関係を明らかにし、統合的・道具的動機と内発的・外発的動機に関する先行研究の動向をまとめた。また、外国語学習の場で行われた最近の研究の中で、今後調査研究を進めるうえで参考になるとと思われる研究を調べ、その研究動向を掴んでみた。

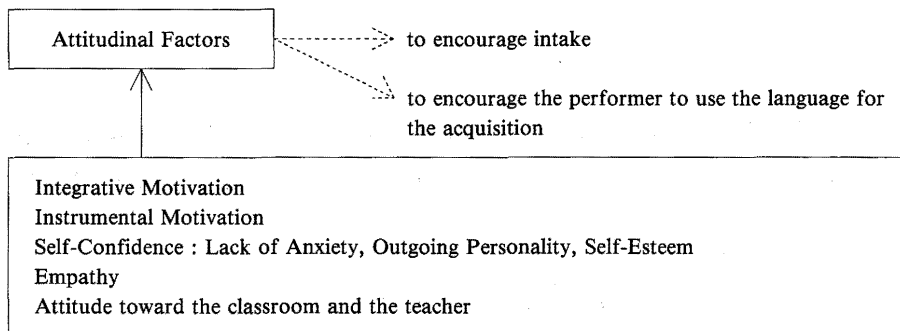
言語教育における Motivation と Attitude の概念

言語教育に関する研究の中で motivation と attitude の定義は曖昧で、ごく常識的な理解でこの言葉が使われてきた。Motivation はもともと 'begin to move', 'help someone(something) to activate' を意味し、「何かをする意欲を喚起すること」である。Motivation とは、「行動を触発し、触発した行動を維持し、さらにその行動を一定の方向に導き終結させる過程」である。¹⁾

Attitude は「特定のものへ向けられた知覚と前もって準備された反応(a perceptual orientation and response readiness in relation to a particular object or class of objects)」と定義され、一次的な状態ではなく持続性をもっており、物事に対する評価であり、感情を表している。それは直接観察できないが、意見などのような観察できる事象で推し量られるものである。²⁾

Motivation と attitude の関係について Krashen(1981)はより具体的な記述をしている。Krashen によると, attitude は integrative motivation, instrumental motivation を含むいろいろな変数から成り立っている。パーソナリティ特性や, 教師や授業に対して長い間に形成されてきた態度も FL(外国語)や L2(第二言語)を学ぶ態度に影響を及ぼす。Krashen の記述は Figure 1 のように示すことができる。³⁾

Fig. 1. Attitudinal Factors which relate to L2



Motivation の構成要素

FL 学習において motivation が大きな役割を担っていることは昔から十分に承知されていたが, Pimsleur が Language Aptitude Battery(1961)で尋ねた項目は, 学習者の興味を 5 段階尺度で簡単に調査するだけのものであった。⁴⁾ そのような中であって Gardner と Lambert による社会心理学的な観点からの attitude と motivation の研究は, この分野の研究に大きな貢献をした。

Gardner と Lambert を中心にした integrative motivation と instrumental motivation の研究には, 尊敬している人と同じようになりたいと思う気持ちが人格発達に非常に重要であるという Mowrer(1950)の考え方が根底にある。⁵⁾ Gardner と Lambert は, L2 を学んでいる人が, その言語を話す人々や国に憧れをもつ場合, 彼らと同じようになりたいという気持ちが, L2 の習得に大いに作用していると考えた。その気持ちは, 家庭環境, 自国の文化などによって形成され, それが態度となって表明されたと考え, 一連の調査をした。その結果を integrative orientation(目標言語を話す人と同じようになりたい)と instrumental orientation(目標言語を道具として考え, 何かの利益があるために学習する)に大別した。

Motivation を引き出す根源となるものには幾らか考えられる。Skehan(1991)はその根源となるものを Influences on Motivation として Table 1 のようにまとめている。⁶⁾

Table 1. Influences on Motivation

	Within the Learning Context	The Result of Learning
Outside the Individual	Materials Teaching	Constraints Rewards
Inside the Individual	Expectations Success	Goals

Skehan の Table 1 によると, 実際の指導としては, 教材や指導法, 学習後にその成果について誉めたり(rewards), 逆に何か物事をする事を強制(constraints)したりすることが考えられる。また学習者の心の中では, 学習中にうまくいったことが新しい motivation を生み出したり, 学習者自ら目標を作っていくこともあろう。大きく分けて前者は external factor, 後者は internal factor である。それぞれ外発的動機(extrinsic motivation), 内発的動機(intrinsic motivation)を生み出すものである。

McKay(1992)は内発的動機(intrinsic motivation)/外発的動機(extrinsic motivation)と統合的動機(integrative motivation)/道具的動機(instrumental motivation)の関係を Bailey(1986)⁷⁾の記述を基にして次のように示している。⁸⁾

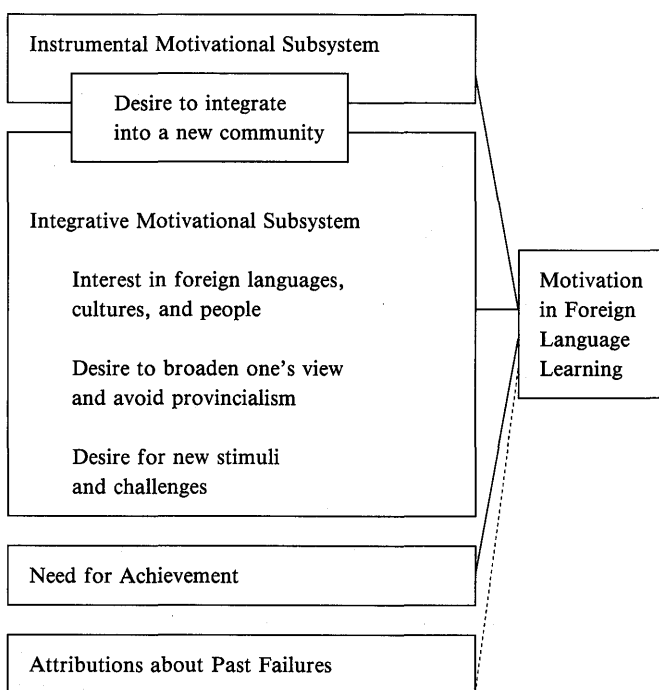
Table 2. Integrative and instrumental motivation contrasted by intrinsic and extrinsic source

	Intrinsic	Extrinsic
Integrative	Learner wishes to integrate with the L2 culture (e. g. for immigration or marriage)	Someone else wishes the learner to know the L2 for integrative reasons (e. g. Japanese parents send kids to Japanese-language school)
Instrumental	Learner wishes to achieve goals utilizing L2 (e. g. for a career)	External power wants learner to learn L2 (e. g. corporation sends Japanese businessman to U.S. for language training)

例えば、英語を習得しようとしている学習者が、自ら英語学習は就職に役立つであろうと考えて学習しようと思う場合(Instrumental-Intrinsic)と、雇用者が会社で英語を習得するように望んでいる場合(Instrumental-Extrinsic)がある。また、習得しようとしている言語社会の文化に関心があってその中に自ら融合したいと思ってその言語を学ぼうとしている場合(Integrative-Intrinsic)と、親の気持ちから、子どもにその言語を学ばせているような場合(Integrative-Extrinsic)がある。

FL 学習と L2 習得の言語環境は異なる。従って学習者の motivation も異なった要素が考えられる。FL 学習の motivation の構成要素として、Dörnyei(1990)は Figure 2 のような図式を描いている。⁹⁾

Fig. 2. Schematic representation of the conceptualized construct of motivation in foreign-language learning



FL 学習の motivation を構成する最も大きな要素としては instrumental motivation があげられる。Instrumental motivation は職業と強く関わり、その職業につくためには、人並み以上の能力が必要である。たとえば、旅行ガイドや通訳業の言語能力は特別な能力を要するし、専門的な仕事をする場合には語学力は必要不可欠な能力として要求される。従ってどのような FL 学習の場であっても、instrumental motivation はほとんど同質のものが現れ、しかも大きな構成要素となっている。FL 学習者の integrative motivation は、L2 習得の場で現れるような目標言語を話す人々や社会へ同化したいという願望ではない。特にその言語が国際語になっている場合は、学習者の願望が特定の国に限られない。言語そのものへの関心や、もっと幅の広い考え方になってくる。Dörnyei は、外国語学習者の integrative motivation の具体的な項目として、目標言語や文化、人々への興味、新しい

視野を広げて、偏狭な考え方を避けたいという願望、新しい環境に入り挑戦したいという願望をあげている。また学習者が外国を舞台にした仕事をしている場合にも、外国の社会にとけ込みたいという integrative motivation がある。この motivation は instrumental motivation と関連する。

さらに Dörnyei は、FL は普通学校で一科目として教えられるから、学習者の達成動機 (Need of Achievement) と過去の失敗経験の要因 (Attributions about Past Failure) が motivation に影響すると考えた。学校で行なわれる外国語教育は、ある課題が出され、それに到達する形で進められるから、学習者の達成動機が大きな役割を果たすはずであるが、外国語教育の場で達成動機と言語能力を調べた研究はほとんど見られない。また、外国語学習の失敗がその後の学習に大きく影響を与えることも十分に想像できる。この領域は language anxiety の研究として、多くの研究事例がある。

Learning motivation を概観すると、Pimsleur の Language Aptitude Test 以来、構成要素の中で学習者の interest がどのような学習場面の調査にも含まれている。興味・関心は、不安とともに外国語の学習意欲の鍵をにぎる大きな要因となっていることはまちがいない。

Language Learning Motivation の研究動向

Integrative/Instrumental motivation の研究は、McGill University や University of Western Ontario で行われた。初期の研究は integrative motivation と proficiency には相関があるという仮説の検証から始まった。Lambert (1955) は、英語よりフランス語の方が堪能なアメリカ人の大学院生を事例研究した。その大学院生は、アメリカに幻滅し、ヨーロッパ的でないものにはすべて顔を背け、フランス語の新聞を読むというようになきわだった行動様式をもっていた。¹⁰⁾ Whyte and Holmberg (1956) もラテンアメリカで働く人々が、ラテンアメリカ社会で彼らと同じようにつき合いたいと思うとき、その土地の言葉を学び、他の人よりもよりうまくなったと報告している。¹¹⁾ また、Gardner and Lambert (1972) は、フィリピンの研究で integrative motivation と aural / oral proficiency に相関があったことを報告している。¹²⁾

ところが FL 学習の場では、integrative motivation と proficiency の関係は弱く、むしろ instrumental motivation が大きく作用すると考えられる。Instrumental motivation の方が integrative motivation よりも大きかったことを示す研究には、Sposky (1969)¹³⁾、Mueller (1971)¹⁴⁾、Maidment (1976)¹⁵⁾、Tomori (1976)¹⁶⁾ などがあり、Instrumental motivation と proficiency の相関を報告した研究には、Mueller (1971)¹⁷⁾、や Gardner and Lambert: the Philippine Study (1972) などがある。¹⁸⁾

その後、integrative/instrumental motivation に関する研究は実に多くの研究者によりいろいろな場面で行われてきた。一連の研究を整理して Au (1988) は、Gardner の理論を 5 つの仮説としてまとめ考察している。¹⁹⁾

Au (1988) がまとめた Gardner の仮説

1. The integrative motive hypothesis — integrative motive is positively related to L2 achievement.
2. The cultural belief hypothesis — cultural beliefs within a particular milieu could influence the development of the integrative motive and the extent to which the integrative motive relates to L2 achievement.
3. The active learner hypothesis — integratively motivated L2 learners achieve high L2 proficiency because they are active learners.
4. The causality hypothesis — integrative motive causally affects L2 achievement.
5. The two-process hypothesis — linguistic aptitude and integrative motive constitute two independent factors affecting L2 achievement.

この 5 つの仮説について、Au が先行研究の結果をもとに述べている見解はつぎのように要約できる。

第一の仮説「integrative motivation は achievement とプラスの相関がある」の調査結果は必ずしも同じ結果が得られなかった。Integrative motivation は単一の概念ではなく複雑な構成要素をもっている。それを一つにまとめて、相関を見ようとするとところに問題がある。しかし Gardner を中心とする研究者はそのことについてふ

れていない。

第二の仮説「文化についての考え方が integrative motivation に影響しそれが achievement と関連している」でも明解な結論は導き出されていない。文化的な背景が異なると文化に関する考え方も異なるので、それが L2 習得に影響する場合も、影響しない場合もある。

第三の仮説「統合的な動機を持っている学習者は積極的であるから、高い L2 能力をつける」は、逆の場合も考えられる。高い L2 能力をもっているから積極的になっている場合もある。しかし、それを見極める調査は非常にむずかしい。

第四の仮説「motivation と学力の関係は原因と結果である。Integrative motivation があるとき、その結果として L2 の高い能力が造りあげられている」については、Burstall, et. al. (1974), がまったく反対の報告をしている。Burstall, et al. の研究では、英国でフランス語を学ぶ 8 才から 11 才までの小学生を対象にして行われた調査で、学習段階の初期の態度よりも、能力が後の学習態度を作っており、それがまた学力につながっていることの方が多かった。²⁰⁾

第五の仮説は、「言語適性と integrative motivation は L2 能力に影響を及ぼす 2 つの独立した要因であり、integrative motivation は、言葉を実際に教えていない状況(informal setting)において、より重要である」である。言語適性と integrative motivation は独立したものではなく、関係があることが調査によって明らかになっているが、仮説の後半部分はほとんど調査が進んでいない。

最近の Gardner 理論は、motivation を構成する要素として「目標言語への自信」(self-confidence)を入れるようになった。Clément(1980)も、言語習得のうえで学習者の自信が integrative motive よりもっと大きな役割を及ぼしているかもしれないと述べている。²¹⁾

FL 学習の motivation 研究では、学習者自身の心理的要因が大きいと思われる。Intrinsic motivation と extrinsic motivation を基礎においた研究がもっと広く行われても不思議ではないが、研究事例は意外に少ない。

内発的動機を構成する主な要素は、興味・関心と知的好奇心である。Wood(1963)はアメリカ、ユタ州 39 の中学と高校で外国語を学ぶ生徒を調査して、落ちこぼれの原因は興味の欠如であることを明らかにした。²²⁾

学習者の興味を喚起する授業研究としては、Ladd(1970)が、生徒に目標言語で自分の好きなトピックスを口頭発表させた報告がある。その結果、生徒が自ら進んで発表するようになり、彼らが選んだトピックスは彼らの興味を表していた。²³⁾ Alsop(1984)は、高校でスペイン語を学ぶ生徒と共に、スペイン語のラジオ放送を作った。その結果、スペイン語への自信と興味が高まったと報告している。²⁴⁾

好奇心(curiosity)について取り上げている文献はさらに少ない。Kharma(1976)は、Kwait の子どもたちはテレビ、雑誌、食料品の缶詰、瓶にいたるまでいろいろな形で英語に触れるから、英語を学ぶ最初の段階では好奇心が大いに見られるが、それが長く続くかどうかは L2 として学習する方法によると述べている。²⁵⁾ Mugglestone(1976)は、教室の中で curiosity を引き出すために、問題解決学習、ゲームやクイズ、ロールプレーを取り入れることを提案したが、²⁶⁾ 最近ではゲームやロールプレーを利用した指導がいろいろな形で行われ、実践報告も多い。授業を工夫したこの種の研究は多くあるが、学習者の興味や好奇心だけに焦点を絞って捉える研究はほとんどなく、興味や好奇心は motivation の下位項目として取り上げられる程度である。興味そのものは内発的動機を中心をなすものであるにしても、学習者の motivation はいろいろな構成要素の総合的な関わりの中で生み出されるためであろう。

興味・関心と好奇心に加えて、有能感や自己決定感を内発的動機の構成要素として考える見方もある。これは Deci(1980)の「人は有能感や自己決定感を実感したいという基本的欲求を持っている」²⁷⁾という考え方に基づくものである。英語教育で言語を実際に使わせる指導(language use)は、正に学習者のこの基本的欲求を満足させるものである。Ellis(1994)が、述べているように、L2 学習をする動機を起こすのは、自分の言いたいことを伝えたいという欲求であり、それが伝わったときの快感であろう。²⁸⁾ Rossier(1975)も、コミュニケーションしたいという願望が重要であり、この願望がないなら、統合的動機をもっていたとしても効果があがらないであろうと述べている。²⁹⁾このように考えると、ヨーロッパ西側諸国で開発された Communicative Approach は最初からコミュニケーションをさせるから、学習者の内的動機を引き出すうえでも注目される。

最近の外国語学習での motivation 研究

学習者の目標言語を L2 か FL かにはっきりと区別することは難しいが、両者の言語環境はかなり異なったものである。学習者の motivation も当然異なってくる。ここでは明らかに外国語学習の場とわかるものに限って、1990 年以降の研究からその動向を調べてみた。

Olshtain, et al. (1990)は、イスラエルでヘブライ語を話し、外国語として英語を学んでいる 11, 12 才の子どもについて、L1 能力と motivation/attitude の関係を調査した。その結果、L1 の能力が FL の能力を予測する大きな因子になっているが、学習者の motivation や attitude はごくわずかな役割しか果たしていないこと、父親の教育レベル、出身民族、家族人数で社会的にも経済的にもあまり恵まれない子どもには、attitude や motivation が影響するが、恵まれている子どもにはあまり関係がなかったことを報告している。³⁰⁾ この研究は attitude や motivation のわずかな側面が調べられた結果であり、外発的・内発的動機の側面からの研究が望まれる。L1 の高い能力をもつ子どもは、すでに内発的にも外発的にも動機づけられているはずである。

Ramage(1990)は、地理的に異なったアラスカとカルフォルニア北部のハイスクールで外国語としてフランス語とスペイン語を学ぶ生徒を対象に、motivation/attitude と、大学入学試験後に外国語を継続して学習しているかどうか状況を調査した。この研究では、成績のほかに motivation/attitude の因子が外国語学習をさらに続けるかどうかを決定する上で大きな影響を及ぼしていること、外国語学習を続ける生徒と、外国語学習をやめる生徒とは文化や言語への興味に大きな差があること、大学入学の条件を充したいという関心は外国語学習を続ける意志のない生徒の特徴であることが判明した。大学入試が終わった後も続けて外国語を学ぶ学生は積極的で内発動機をもっているが、大学入学のためにだけに勉強したものは motivation も低く、運用能力も低かったという報告をしている。³¹⁾

Dörnyei(1990)によると、FL 学習における学習段階によって、motivation の働き方が異なる。Intermediate-level では instrumental motivation が重要な役割を果たしている。Advanced level では sociocultural reason や non-professional reason が出てくる。単に道具として使える英語を習得するというのではなく英語そのものをマスターしたい気持ちが現れる。³²⁾ 上級になれば、今学習している言語を話す人々との接触も増えてくるので当然 FL の言語環境であっても integrative motivation が大きな影響を及ぼすと考えられる。日本の中学生を対象にした奥村(1994)の研究でもほぼ同様の結果が報告されている。中学生は受験をかなり意識して道具的動機を持っているのではないかと考えられるが、奥村の調査結果では、自己評価による英語の得意群は統合的動機、不得意群は道具的動機をもっていた。また得意群は「英語の実用面の憧れ」を強く抱いている。³³⁾

Motivation や attitude の研究は、ある一地域での調査研究として行われてきたが、沖原(1991)は日本の生徒と中国の生徒とを比較した。調査は日本の中学と高校のいずれも 3 年生と、中国の初級中学、高級中学のいずれも 3 年生を対象に行われた。その結果、中国の生徒は全体の 57% が「英語学習に興味がある」と回答したが、日本の場合は、「興味がある」、「どちらでもない」、「興味がない」の回答がほぼ 3 等分の状況で分かれた。このことは中国の英語教育では、学年が進んでも生徒の興味が持続していることを示している。また、教師や教科書に対する態度でも違いが見られた。日本の生徒は、勤勉ではあるが、要求が強く、与えられるものに対して批判的である。あるいは堕落していることもある。中国の生徒は学習に熱意があり、先生を尊敬し、学習に真面目な態度で取り組んでいる結果が出た。³⁴⁾ この結果については、沖原(1991)の指摘の通り、中国の英語教育は限られた上層部の生徒に行なわれているためでもある。類似した英語学習動機づけに関する日中比較研究は、松島、橘(1995)によっても行われている。³⁵⁾

今後の課題

Anxiety が trait anxiety(性格特性としての不安傾向)と state anxiety(特定の状況下で経験される不安)に分けて考えられているように、motivation も性格特性や場面状況が大きく影響する。Gardner and Tremblay(1994)も、比較的変動のあるそれぞれの学習者の人格から生じる trait motivation と、言語学習の状況によって現れる state motivation があると考え、両者を分けてこれからの研究を進めるべきだと提案している。³⁶⁾ 学習者の motivation をこのように分けて考えるとき、motivation を高める方法が明らかになってくるであろう。

日頃その言語を話さない FL 学習の場ではいかに motivation を高めるかが教師の大きな課題である。教育心理学の分野では intrinsic/extrinsic motivation が大きな研究課題であるが、FL 学習の場ではあまり取り上げられていない。Sadow(1994)が述べているように、社会心理学的な motivation 研究が先行するあまり、言語学習の intrinsic motivation の研究が見逃されてきた感がある。³⁷⁾

今後は integrative/instrumental motivation の研究を基礎にして、trait/state motivation や intrinsic/extrinsic motivation の調査が行われ、さらに研究が進むものと思われる。

引用文献

- 1) 小林宣利(編),『臨床教育心理学辞典』,北小路書房,京都, p. 295 (1980)
- 2) Eysenck, H. J. and W. A. Würzburg, *Encyclopedia of Psychology*, London, Search Press, p. 286 (1972)
- 3) Krashen, S., *Second Language Acquisition and Second Language Learning*, Oxford: Pergamon Press, pp. 22-24, (1981)
- 4) Pimsleur, P., *Pimsleur Language Aptitude Battery*, Harcourt, Brace & World, Chicago, (1961)
- 5) Mowrer, O. H., *Learning Theory and Personality Dynamics*, New York, Ronald, (1950)
Gardner, R. C. and Lambert, W. E., *Attitudes and Motivation in Second-Language Learning*, Newbury House, Rowley, Mass., p. 12 (1972)より引用した。
- 6) Skehan, P., 'Individual Differences in Second Language Learning', *SSLA*, 13, p. 281 (1991)
- 7) Bailey, K. M., *Class Lecture Spring 1986*, Monterey Institute of International Studies (1986)
- 8) McKay, S. L., *Teaching English Overseas: An Introduction*, Oxford University Press p. 26 (1992)
- 9) Dörnyei, Z., 'Conceptualizing Motivation in Foreign-Language Learning', *LL*, 40, p. 68 (1990)
- 10) Lambert, W. E., 'Measurement of the Linguistic Dominance of Bilinguals', *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 50, pp. 197-200 (1955)
- 11) Whyte, W. F. and Holmberg, A. R., 'Human Problems of U. S. Enterprise in Latin America', *Human Organization*, 15, pp. 1-40 (1956)
- 12) 前掲 5) Gardner and Lambert, p. 130 (1972)
- 13) Spolsky, B., 'Attitudinal Aspects of Second-Language Learning', *LL*, 19, pp. 272-283 (1969)
- 14) Mueller, T. H., 'Student Attitudes in the Basic French Courses at the University of Kentucky', *MLJ*, 55, No. 5, pp. 290-298 (1971)
- 15) Maidment, E. H., 'The Motivation of Students Studying EFL in London', *ELTJ*, 31, No. 3 pp. 203-207 (1976)
- 16) Tomori, S. H. O., 'A Diachronic and Synchronic Study of the Motivation for Learning English in Nigeria', *ELTJ*, 31, No. 2, pp. 146-158 (1976)
- 17) 前掲 14) Mueller (1971)
- 18) 前掲 5) Gardner and Lambert, p. 130 (1972)
- 19) Au, S. Y., 'A Critical Appraisal of Gardner's Social-Psychological Theory of Second-Language (L2) Learning' *LL*, 38, No. 1, pp. 75-100 (1988)
- 20) Burstall, C., Jamieson, M., Cohen, S., & Hargreaves, M., *Primary French in the Balance*, London, United Kingdom, NFER Publishing Company(1974)
前掲 19) Au, p. 86(1988)より引用した。
- 21) Clément, R., 'Ethnicity, contact and communicative competence in a second language,' In H. Giles, W. P. Robinson, & Smith, P. M. (Eds.), *Language: Social psychological perspectives*, Oxford, United Kingdom: Pergamon Press, pp. 147-154(1980)
前掲 19) Au, p. 89(1988)より引用した。
- 22) Wood, L., *A Study of Student Attitude toward Foreign Language Education Study in the Public*

- Schools of Utah*, Bethesda, Maryland: ERIC Document Reproduction Service, Ed. 073 711, (1963)
- 23) Ladd, M. M., 'Motivation through Major Interests in Intermediate Foreign Language Learning,' *MLJ*, 54 (1970)
- 24) Alsop, T. W., 'Planning a Radio Broadcast — An Opportunity to Increase Interest in Foreign Language Courses,' *FLA*, 17, No. 3, pp. 191-194 (1984)
- 25) Kharma, N., 'Motivation and the Young Foreign Language Learner,' *ELTJ*, 31, No. 2, pp. 103-111 (1976)
- 26) Mugglestone, P., 'The Primary Curiosity Motive,' *ELTJ*, 31, No. 2, pp. 111-116 (1976)
- 27) Deci, E. L., *The psychology of self-determination*, D. C. Heath & Company (1980)
新井邦二郎,『教室の動機づけの理論と実際』, 金子書房, 東京, p. 16 (1995)を参照した。
- 28) Ellis, R., *The Study of Second Language Acquisition*, Oxford, Oxford University Press p. 516 (1994)
- 29) Rossier, J., 'Extroversion-introversion as a significant variable in the learning of English as a second language,' Unpublished doctoral thesis, University of Southern California, *Dissertation Abstracts International* 36: 7308A-7309A
前掲 31) Ellis, p. 516 (1994)を参照した。
- 30) Olshtain, E., Shohamy, E., Kemp, J. & Chatow, R., 'Factors Predicting Success in EFL Among Culturally Different Learners,' *LL*, 40, No. 1, pp. 23-44 (1990)
- 31) Ramage, K., 'Motivational Factors and Persistence in Foreign Language Study,' *LL*, 40, No. 2, pp. 189-219 (1990)
- 32) 前掲 9) Dörnyei (1990)
- 33) 奥村智美,「英語における学習状況と動機づけの関連」,『中部地区英語教育学会紀要』, 24, pp. 7-12 (1994)
- 34) 沖原勝昭,「英語学習意識に関する日中比較研究」,『神戸大学教育学部研究集録』, 87, pp. 117-126 (1991)
- 35) 松川禮子, 橋良治,「英語学習動機づけに関する日中比較研究(1) — 中・高生の英語学習動機づけ — 」, 第21回全国英語教育学会発表資料(1995)
- 36) Gardner, R. C., and Tremblay, P. F., 'On Motivation, Research Agendas, and Theoretical Frameworks,' *MLJ*, 78, No. 3, p. 364 (1994)
- 37) Sadow, S., "Concoctions": Intrinsic Motivation, Creative thinking, Frame theory, and Structured Interactions in the Language Class,' *FLA*, 27 No. 2 pp. 241-249 (1994)